

去十一日於落合上畠合戰之時、一番被初合戰、太刀鎧疵蒙十三箇所、或突伏、或組討、爲驚目御働之上、木澤左京亮長政討捕之、彼是無方量御忠義、凡別義之御高名、且云戰功、且云御本意、無類之御名譽候、御感之上、既植長被成自翰候、爲軍功之地、八尾之内七百貫被宛行候、全可有御知行義肝要候、次多門鎧一領紫糸、太刀一腰吉房、進之候、併軍功之廣色計候、仍感狀如件、

天文十一年三月廿一日

遊佐河内守長教判

三木牛之助殿進之

近年戰國ニテ感狀ニ預ル者多シト云ヘ共、如此之褒美ノ文章誠以世ニ稀也トテ、皆人羨ケルトゾ聞ヘシ、

〔備前老人物語〕ある人の語りしは、鞠は九損一徳とて、いらざる事とはいひつたへたれども、わかき時すこしは心懸たる事よろしかるべし、いにしへ秀吉公より、近江國六角殿へ御祝義の時、仰られけるは、六角殿は古風の家なれば、規式正しかるべしとて、禮義をわきまへて、武士道の譽ありて、器量よき人を三人撰出されて、御供にさぶらはしめらる、その一人は古田肥後守殿、二人はたしかに覺えず祝言の儀式作法、首尾相應して、その次第殘る所なし、其後六角殿家老衆御供の人々を日々にふるまひ、さまざまむつかしき事ども仕かけ、れども、更に越度もなし、ある日御饗應過てのち、しづかなる夕暮に、鞠の興行あるべしとて、上手を撰び合手をなして、御慰にあそばされといふ、度々辭退におよびしかば、さればよ、鞠は不得手成とおもひて、いよく所望する事止ざりけり、この時肥後守かほどに御望あるに仕ざるは、はかりなれば、某たち出、その仕形ばかりをも御目にかかけ申べしといひて、ぎを立ちてもたせたる狭箱の中より、鞠の裝束を取出し、衣紋つくろい、しづかにあゆみ出たり、もとより鞠は上手也ければ、人々目を驚しけり、此事聞召れて、諸事に心懸名譽也と、秀吉感じ給ふ事な、めならず、褒美下されしと也、